

「高砂の松も昔の友ならなくに」

増山雄三

市民が自由に海浜や海岸に入れ、自然の恩恵を享受できる、いわゆる「入浜権宣言」が昭和五十年（一九七五年）に、高砂市で採択されたが、それに携った、阿弥陀村出身で威勢のよい人物が、私の職場の同僚にいた。それで、臨海部に広がる、カネカの高砂工業所の奥に、幾つもの塩の山が聳え、一山はざっと七米の高さで重さが七百トあり、メキシコや豪州から輸入され、電気分解された後、塩化ビニールや苛性ソーダの原料になる。塩は昔から瀬戸内科の特産品だったが、天日と浜を使う入浜式塩田は、デルタや干潟に作られ、雨の少ない瀬戸内海は最適であり、高砂、大塩、的形、赤穂あった塩田は、今では消え埋立てられ、そこに出来た巨大化学工場が、輸入の塩を扱っているのだ。

それで、明治時代の後半以降、三菱製紙と鐘淵紡績を牽引車として、高砂は工業都市としての道をひた走って、高砂市はそれ以降には変容を続けていき、戦後にいち早く、工場誘致条例を施行したのである。

それで、沿岸部全域の埋め立ては、兵庫県の事業として、昭和三十六年（一九六一年）に始まり、武田薬品、関西電力、三菱重工、神戸製鋼といった大企業が進出し、播磨工業地帯の高砂は、列島改造を牽引した、拠点開発方式の「模範生」となったのである。

環境の時代二なった今から思うと、海岸線の埋め立てという、地域開発の規模には驚くが、戦後の高度経済成長の過程で、工場用地や宅地用地として埋め立てが進み、各地で多くの白砂青松の浜辺が、消滅してしまった。

また、高砂ではPCB汚染や赤潮それに光化学スモッグといった公害も発生し、PCBはカネミ油症事件を起こし、三菱製紙はPCBを含む廃液の、土壤汚染も起したので、自

然と海浜がほぼ失われた七三年に、市民の間から、「入浜権」を求め運動が起きた。それから半世紀が過ぎ、各工場では先端の研究による製品開発に余念がないが、カネカの注目事業は、海水中でも容易に分解する、「生分解性ポリマー」を開発し、またこの製品は、使い捨てプラスチックによる、環境破壊を防げるという、優れたものでもある。

最近では、政府の経済産業相も視察に訪れたというが、光を放つ工場に対して、既成市街地は、高齢化と人口減少に苦しむが、世紀を超えて、環境と開発のプラスチックな変化を体現した、工業都市の現実は厳しい。

先に、入浜の権の話をしたが、当時、入浜権の思想が各地に力を持ち得たのも、そのよくな、精神の自立性と郷土愛が、その背景にあったからなのだろうと思われる。

企業の占有ではなく、市民が自由に行き来できるように、コンクリートの護岸を撤去して再生した、県立の高砂海浜公園を歩くと、

松林を抜けて渚にでてくる。  
すると、百人一首にある「誰をかも知る人  
にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」という  
場所は、雨上りの日差しに輝く播磨灘は、海  
と空の青が連続していたのである。

令和四年六月